

みんなの童話

新幹線の老ば

正月は、富士山の見えるばあちゃんの家で……、そう考えていた健太は、一人で新幹線に乗った。

指定席のとなりには先客がいた。白いかみの毛をたらし、大みそかだというのに、白い着物すがたの老ばだった。すわった健太に、「どこへ行くのか」と、聞いた。

「静岡です」「わしもそつだ」

ふたりの会話はそれだけだった。ところが静岡駅に着いた時、老ばはいなかった。景色に見とれていたのがつかなくかつたのか、健太はそう思って降りた。

でも、プラットホームにもすがたは見えなかつた。健太は首をか



しげながら駅を出た。

静岡は父さんの故郷、みんな大喜びで健太を迎えてくれた。

「今夜は、うんとご馳走してやるでな。ゆつくり休んどりあ」

と、ばあちゃんに言われたが、ゲームもないし、テレビもおもしろくない。たいくつになつて外へ出た。

でも別に行く所もない。よし、裏山に上つてみようと思つた。

ばあちゃんの家から五、六分歩くと浅間神社の裏山を上る道がある。ところが道は意外に荒れていた。やめようかとまよつた。でも頂上からのすばらしい富士山を見たかつた。

曲がりくねつた山道を上り始めたが、だんだん心細くなつてきた。引き返えそうとした時、うす暗い林の横道から、ふわ、ふわ……と何か白いものが近づいて来た。

「なあーんだあ？ 健太はびつくりして立ち止まつた。あーっ、木もれ日に照らされ

たのは人間だつた。まっ白な着物にまっ白なかみの毛を肩までたせた、あの新幹線の老ばだつた。

健太は、あまりのおどろきに声もせず、木にしがみついたまま身動きもできなかった。老ばはそんな健太の先を横切つて、林の茂みの中に消えて行つた。

その夜、健太は、ころげるように逃げて来たことだけはかくして、新幹線のことや裏山のことをばあちゃんたちに話した。おじさんは、「ふうん」

と、首をかしげたが、大学生の兄ちゃんや高校生の姉ちゃんは、声を立ててわらつた。

でもばあちゃんは「それ、山んばだつたかもしれん」と、まじめな顔で話した。

「ばあちゃんが子どものころ、裏山にや山んばがいるで、一人で行くと食われちゃうぞ」つて、言われていたものだ。山んばは、山に住む女の魔物のことよ。まっ白いかみの毛をのびし、きばをむき出して人を食い殺す、おそろしい魔物だ」

話を聞いていた兄ちゃんが、

「健太は新幹線の老ばが気になつていたんだ。それに山道がこわくて、見えもしないものが心の中で重なつてしまつたんだな」

と勝手にうなずくと、姉ちゃんが、「そう、ゆづれいと同じよ。健太はおくびようだから、昼間のゆめでも見たんでしょ」と、またわらつた。

「ま、それにしても富士山が見えなかつたのは残念だつたな。あしたは元日だ。すばらしくよく見える所へ連れてつてやるつ」

おくびようだつて、姉ちゃんに言われておこれていた健太だつたが、おじさんのうれしいことばでいかりをおさえた。

でも、新幹線の老ばも裏山で見たまのも同じだつたんだ……。健太はふとんに入つてからもそう思つた。

童話作法講座 しろやまの会

講師 寺沢正美